昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十五年十月十五日発行（毎月一回、十五日発行）
（通第一三九号）

慈光

第十二巻　第十號

池山先生廿三回忌記念号

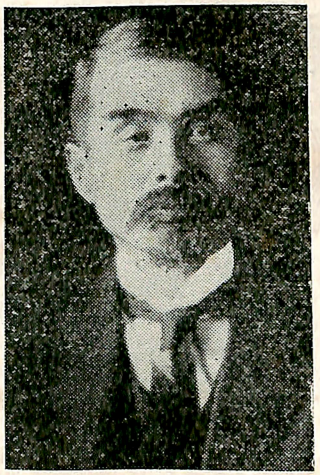
目次

微苦笑の聖人……池山栄吉…（1）
萩と犬と……池山寿夫…（8）
或日の池山先生……花田正夫…（11）
池山先生の思い出……都崎雅之助…（15）
凡俗雑感二題……松村勝治郎…（16）
先師の廿三回忌に……榊原徳草…（17）

微苦笑の聖人

――歎異鈔二章――

池山栄吉



甲南時代の面影

『あわれなるかな、恩顔は寂滅の煙に化したまうといえども、真影を眼前にとどめたまう。悲しいかな徳音は無常の風にへだたるといえども、実語を耳の底にのこす』

生れて租師御在世の時に遇わず、和顔を仰ぐことの出来ないのは遺憾の極みであるが、幸なるかな、耳の底に残る愛語は、髣髴として温容を想見せしめるものがある。

この見地から歎異抄第二章を拝読してそこに現われる聖人の御姿に見入つて見よう。

全体を通じて優しさの溢れんばかりの情調の中に、相手の身心を浸透する白熱的意気込を感ずる。それは折角、光明名号の父母の間に生れた信心の子を『法の魔障、仏の怨敵』の手から取りもどさずにはおくまいという、潑溂たる生気の迸りである。

聖人の前に歩みを遼遠の洛陽にはげまして、関東からたずねて来た同行衆が、やれ〳〵日頃の念願がかなつたという大満悦の面持で、今はじまるお話に全身を耳にし、固唾を呑んで控えている。

聖人はやおら悠揚迫らず、諄々として語り出される。その一言々々には満腔の力がこもつている。そして又その一声々々は、並み居る人達にとつてどんなに懐かしい響であつたろう。

聖人はすこぶる真面目に一坐を見やりながら……

『各々十余ケ国のさかいをこえて、身命をかえりみずしてたずね来たらしめたまう御こころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり』

……と先ず、純粋内的な動機への集中をうながす。これは聴者の居ずまいを正されるのである。

信仰はその対象と、面と対つて坐らないと聞かれない。これも他山の石の一つである。『美しい魂の告白』（ゲエテ著）の女主人公が、その獲信の告白の中で

『あゝ神様、どうぞ私に信仰を授けて下さい、と私はあらん限り気をはり心を引きしめて祈つた。私は傍の小さい卓子にもたれて、両手に泣き濡れた顔を押えていた。その時、私は神様が私達の祈りをきいて下さるには、どうでもそうなくてはならない状態、然し滅多とそうはなりきれない状態にあつたのだ』

と言つている状態、そうした心の向きこそ、対象への正坐、即ち一心正念というものである。

「ひとえに往生極楽の道をといきかんがためなり」

ただ〳〵まことの信心を得たいためであるからには、外に心を散らし気を移さぬようと、かた〴〵念を押されたのである。

聖人の気色は一層緊張を加える。

『しかるに念仏より外に往生のみちをも存知し、また法文等もしりたるらんとこころにくゝおぼしめしておわしましてはんべらんは、おゝきなるあやまりなり』

救の種は念仏一つ。そのほかに何か知つとく必要があろうなどと、そんなことに心をひかれては駄目。ただ信心を要とすと知るべし、そのほかをばかえりみるな。と目の附け所、狙いの的を指定される。

『もししからば』

と聖人は口辺にかすかに笑いをたゝえて続ける。

『南都北嶺にもゆゝしき学生たち、おおくおわせられて候なれば、かの人々にもあいたてまつりて、往生の要よく〳〵きかるべきなり』

知るが目標なら、此所へ来るのはお門違いと、凛とした断言に伴う微笑には、幾分からかい――是非ここでという御望みなら御覧に入れてもよいが、と己が懐をのぞくような――の気味を帯びてはいるが、苦笑の影はまださしていない。それはそのはず、まだとつときを出さずにいるのだから。これさえ出せばなんぼなんでも落ち着くところへ落ち着かすことが出来よう、との期待があるから。

さていよ〳〵とつときを持出される段になる。聖人の御様子はがらり一変する。聖人はかつての――そして今もなおそのまゝ続く――自己に沈潜したまう。そしてその自内

証？

省の境から虚心坦懐、ありのまゝに告白された信体感が、『親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおゝせをこうむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり』

の声明である。もしこの時、まともに聖人のお姿を仰いだ人があつたなら、その人は恐らく大寂定に入りたまえる釈尊を瞻仰して、希有の光瑞を看取し得た阿難のこころよさを味つたことであろう。

聖人はその昔、吉水の禅室で法然上人と対坐して、この快よさを感得し、その容を見れば、法然上人、その声をきけば弥陀の直説という『よき人のおゝせ』に値われた。

月を中にして地球と太陽と真直に並んだ時、その線上の一定の地点から月を仰ぐと、皆既蝕、もしくは金環蝕の光景に接して、月の周囲に太陽の光線の一異象であるところの銀霧、紅炎の渦巻き漲るのを望見するであろう。聖人は上人を通してこの銀霧、紅炎を拝した。

それが即ち『たゞ念仏』である。

序に一言しておくが、口に念仏の出にくかつた私が、はじめて『念仏申さんと思い立つ心』の起つた時は、この『親鸞におきては』の御文に引き込まれた時であつた。

あゝ本当の信仰が欲しいな、と思い詰めた刹那、胸に浮んだこの御文に驚かされて、あゝ聖人もそうされたのか、たゞ念仏してか、じや私も、と聖人の口真似をして、思い切つて一声『南無』と言いかゝつた時。ーそしてまだ『阿弥陀仏』と言いきらないうちに――未曽有の心境、光の滝を浴びせられた、とでもいうよりほか言いようのない気持になつて、止めどなく念仏が出る。暫くしてから、あゝこれが信仰かと自からうなずけたのであつた。何のことはない、聖人と声を合わせて念仏をしかけたら、何時の間にやら聖人のお姿は消えて、如来の光明の直射に触れた、といつた趣。

聖人は更に話頭を転じて慨然として語りつづける。その語気と表情には沈痛な自嘲の気色が動く

『念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄に落つる業にてやはんべるらん総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからずそうろう。そのゆえは自余の行をはげみても仏になるべかりける身が、念仏をもうして地獄にも落てそうらわばこそ、すかされたてまつりてという後悔もそうらわめ、いずれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし』

これは先の『念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をもしりたるらんと云々』に照応して、一つには、『総じてもて存知せざるなり』で、吾が無智を再認識し、また一つには『いずれの行もおよびがたき身なれば』で、吾が無能を自認した。だから、早く自力作善の見地から、一躍して『ただ念仏』の信界へ飛び込めよとの勧めである踏切地点の指摘である。そして夫の『しかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり』と第九章にある聖人の御述懐こそは、正しくその踏切の最後の動機たるべきものである。

聖人の御顔が急に晴れわたる。雲間を出る月影のように、明皎々として此の世ならぬ聖らかさにかゞやく。真に光顔巍々の言葉そのままである。この威容顕曜の中から玉音朗かに語り出で給うたのが、

『弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞がもうすむね、またもてむなしかるべからずそうろうか」

という「如来の御代官」としての啓示である。つい今のさき『……総じてもて存知せざるなり』と弱音を吐いた人の言葉として何たる雲泥の懸隔であろう。あれは自見の立場からの歎声であり、これは信界の裡からの呼びかけであるからで、夫の銀霧、紅炎を親しく踏見した人にしてはじめて敢てなし得る宣言である。

聖人は言おうと思われたことを言い終えられた。今まで支配した緊張がおのずからゆるむ。それは当然である。然るに何事ぞ。またもや御気色が憂鬱にかげるではないか。

『詮ずるところ愚身が信心におきてはかくのごとし、このうえは念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々の御はからいなり』

『詮ずるところ……』と、愈々末尾の一段にとりかゝられて、再び一座を見まわされた聖人は、恐らく太息と共に『このうえは……』と吐き出すように仰言つたと推せられる。聴者の様子に聖人の期待に副わない節が多いからである。山と盛られた信心の引出物に差しのべられる手がすくないからである。

『面々の御はからいなり』痛切骨を刺す皮肉と聞える。私はここに聖人の微苦笑を拝見する。

一体はからいは他力信仰のうらはらである。例えば歎異

抄第十一章に

『つぎにみずからのはからいをさしはさみて、善悪のふたつにつきて、往生のたすけさわり、二様におもうは、誓願の不思議をばたのまずして、わがこころに往生の業をはげみて、もうすところの念仏をも、自行になすなり』

とあるように、また同第十六章に

『信心さだまりなば、往生は弥陀にはからわれまいらせてすることなれば、わがはからいなるべからず……しかれば念仏ももうされそうろう、これ自然なり。わがはからわざるを自然とはもうすなり。これすなわち他力にてまします』

とあるように、はからいの反対が自然であり、他力であり、無義為義であり、信仰である。そして信仰それ自身はひとえに弥陀の御もよおしにあずかるもの、如来よりたまわるもので、わがはからいでわれに得られるものでなく、人に与えられるものでもない。

然し聖人は必ずしも皮肉、反語として面々の御はからいと言い放つていられるのではない。惟うに聖人が衷心希望してお勧めになるはからいとは、念仏取捨の決意として、獲信途上、唯一のゆるされたるはからいであろう。即ち信仰への決定的一歩、『念仏申さんとおもいたつこころ』である。それも畢竟矜哀の引入であつたとは後から気附くはからいで、この意味でのはからいは、単に許されたというばかりでない。なくてはならない必然の過程である。例えば歎異抄第十六章、廻心の条に

『その廻心とは、ひごろ本願他力真宗を知らざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、日頃のこころにては往生かなうべからずとおもいて、もとのこころをひきかえて、本願をたのみまいらするをこそ、廻心とはもうし候え』

とある。その『とおもいて』というのがそれである。また例えば二河白道の譬喩の中に

『この人すでに空曠のはるかなるところにいたるに、さらに人物なし、おゝく群賊悪獣あつて、この人の単独なるを見て、競い来つて殺さんと欲す。この人死を怖れて直ちに走りて西に向うに、忽然としてこの大河を見る。即ち自ら念言すらく云々』

献かさねて、

『時に当つて惶怖することまた言うべからず、即ち自ら思念すらく云々』

最後に

『この人すでに此所に遣わし、彼所に喚うを聞きて、即ち正しく身心に当つて決定して、道をたずねて直にすゝんで疑怯退心を生ぜず云々』

とある。その『念言すらく』、『思念すらく』、『決定して』とあるのが即ち獲信直前のはからい、念仏もうさんとおもいたつ心への踏切りである。

けれども相手が此所まで進んで来ないで、そのはるか手前のあたりでぐずぐずしているのでは、聖人のまじめで仰言る『面々の御はからい』という言葉も、いやでも応でも皮肉と聞え、反語と響かざるを得ない。行手に幸あれと名残を惜しむ馬の鼻にすぎない。それは聖人の御本意に背くこと遠しで、聖人の微苦笑は『親鸞は弟子一人ももたずそうろう』のたよりなさと、それを裏つける『弥陀の御もよおし』の心強さの融合感である。

こうした感じを積極的に言い現わされたのが、『教行信証』総序の終末の御文である。

『あゝ弘誓の強縁は多生にもまうあいがたく、真実の浄信は億劫にもえがたし。たまたまこのたび疑網に覆蔽せられなば、かえりてまた曠劫を逆歴せん。まことなるかなや摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ……』

『聞思して遅慮することなかれ』これこそ聖人が衷心希望していられる『面々の御はからい』なのである。聖人の微笑に交る苦の影を消して、快いそれに代らせる、それは独り、そのかみの関東の同行ばかりではない、聖人の信仰にあこがれる人皆の念願でなくてはならぬ。

「仏と人」一里塚より

池山先生略譜

明治六年　東京にて誕生。
独乙協会学校出身、学習院教授。

明治卅二年　宗教法案問題おこり、近角常観師・後藤新平氏と共に句仏上人の法律顧問となり、貴族院にて審議未了に成功。

明治卅三年　近角師と共に東本願寺より三年間の欧州留学を命ぜらる。近角師は世界の思想と宗教事情の研究。池山先生は労働問題と社会事業研究

明治卅五年　真宗大学（当時東京）教授。
社会事業の計画、桂太郎・後藤新平・児玉源太郎氏等の賛同あり。

明治卅六年　自活自営の立場から、神田須田町に煙草屋、徳香社を創立、自ら店主となり苦学生を資けらる。

明治卅七年　日露戦争を機として煙草は政府の専売となり徳香社は小売店となり、併せて久美油の販売も始められ、絵葉書の日本での売り初め等せらる。

明治卅八年　事業遂に失敗、徳香社も解散、皮膚病劇しく真宗大学も辞められて、府下荏原町に浪々の生活、本郷森川町に近角師を訪い、歎異抄を読み始めらる。

明治卅九年　東京を去り、名古屋、大阪桜宮、方面に転々と移住。同年、近角師と沢柳政太郎氏の斡旋により岡山高等学校独逸語教授とならる。

大正二年　四十二歳の時、歎異抄二章より、念仏の玄意を得られて常念仏の人とならる。

大正五年　夏、備後鞆町の明円寺（松江岩人師）にて「廻心」という題で近角師と並んで始めて講話さる。両師のよろこびきわまりなし。先生は御子様五人と夫人同伴。

大正六年　清子夫人、胃癌、手術不能との宣告をうけられ、その惨事の中に不思議にも夫人の信眼ひらかる。

大正七年　時あたかも結婚二十年記念の年、夫人のために生別と死別をかね送別会催さる。近角師は東京より御見舞。その年五月遂に念仏往生せらる。

大正八年　夫人の追悼記念に『独訳歎異抄』出版。同年十月、御老母また御逝去。

大正九年　亡き母の記念として『意訳歎異抄』出版。

大正十一年　『絶対他力と体験』出版。

大正十三年　甲南高等学校長丸山環氏の要望に広じられて転任、住吉に移らる。

（註）大正十三年二月十七日の日記抄。

私の関係した、若しくは関係しうべき問題に、最広義の社会問題と信仰問題とがある。狭義の社会問題には二十年前に手を着けて実行の段には至らなかつたが、今日盛に発展しつつある。信仰問題では、自身十年前にふれて今日まで続いている。今更私が社会問題でもあるまいし、今後私が貢献することの出来るのは信仰問題の方だろう。

十年後に信仰問題が今日の社会問題のように盛んになろうとは思わないが、社会問題が十分に発達してもそれから信仰問題が盛んにならなくてはならない筈だ。つまり社会問題は信仰問題に基礎づけられなくてはならぬ。両問題の関係は裏と表の様なものである。そう考える人はすくない、自証してる人は猶更に。

昭和二年　『信を行く旅人』出版。

昭和三年　友子夫人と再婚せらる。

昭和四年　大谷大学教授となられ、京都紫野に假寓。同年、三男幸吉様、急性腎臓病で急逝、その臨終に仏に全托せられて静かに往生さる。

昭和九年　先生は「念仏のしみこみ」と讃えらる、時に「たまさかに如来に面す春の風」の句あり。

昭和十二年　後、蓮華谷の新居に移転。生死もわかぬ大病さる。

昭和十三年　大谷大学を退かれ、静居さる。『仏と人』出版。六十七歳、十一月八日、念仏の息絶え終らる無碍院釈一道栄信士との法諡を近角先生より送らる。

萩と犬と

——父の廿三回忌に——

池山寿夫

昭和三年に日本を出て南米に移つた私は、それからの十年間、父が亡くなります迄を、遠く離れて暮しました。

其間、昭和十年八月から十一年の二月迄、約半歳を蓮華谷の家で、父と一所に暮しましたが、幸にその時分、父は健康上に少康を得ていたとは言うものの、殆んど家にばかり居りましたし、言わば、私は父の晩年の歩みは全然知らないと申さねばなりません。

再び向うへ帰える為に家を出る時、父がくれた色紙には

「紅梅を見せでわかるる恨かな」と一句がしたためてありました。父も笑いながら渡してくれ、私も出来るだけ何気なく受取つたつもりでしたが……随分苦しゆう御座いました。微笑つていた父は一層そうだつたろうと思います。自分の子供も、お蔭様で大きくならせていただいた今になつて、このことがはつきり判ります。

長男でありながら、自分勝手な、飛んでもない人生航路を撰んだ私でした。申しわけ無さで心が一杯でしたが、それだけに、信国先生御夫妻や治田様、その他、数多くの方々が父のまわりにしつくりとお寄り添い下さつていたことがどんなに嬉しかつたか判りません。本当にありがたいことでした。

父は萩が好きでした。長い間の岡山時代には、手入れも何もしない庭に、ただ萩だけを十株近くも植えていましてそれがスクスクと芽を出す頃から、花の盛りを過ぎて、わくら葉が風に散らされる初冬の風情に到る迄を「いゝなあいゝなあ」と言つて飽かず眺めていました。

昭和十八年の暮、交換船で送り帰えらされた私達一家は終戦後、直ちに高知に来て暮すことになりました。高知には割に萩が少ないのですが、一昨年手に入れた萩の一株が今年はすつかり枝を張りました。私も、いゝなあ、と思います。そしてそのたびに「いゝなあ」という父の声を心にききます。四十年前の父の声が、まざ〳〵とひびいてまいります。

萩にからまるこんな思い出があるんです。

それは大正十二三年頃、岡山市の三友寺境内に住んでいた頃でした。数株の萩が、夫々に四畳半の座敷一杯位に枝を張つて、さまで広くもない庭は萩で埋れた初秋の或日のことでした。

その日は午前中で帰つてくる筈の父が、昼食時にも帰つて来ません。何処へ寄つたのかと思つていましたら、四時頃になつて帰つて来ました。当時飼つていました黒い犬ーテルという名でしたか知ら――をつれて、而も犬の首に結びつけられた荒縄をその儘手にして、嬉しそうに、ニコ〳〵して帰つて来ました。部屋に上がるなり

「あゝお腹が空いた。御飯にしておくれ」

と言つて、庭を見て「あゝ、萩がきれいだ」とつぶやきました。そして「今日はね、ありがたかつたよ」と言うなり止め度もなくお念仏が父の口から流れ出ました。

その日、予定通り父は正午頃、家の近くまで帰つて来ていました。ところが、近くの小母さんが父を見ると飛んで来て

「お宅のテルが、今犬捕りにとられましたよ」

と知らせてくれたので、父は直ぐその場に馳けつけたのだそうです。当時の野犬狩りは惨酷なもので、大抵その場で犬を叩き殺しました。父が馳けつけて見ると、おとなしいテルは苦もなくつかまえられて、首に荒縄をかけられて、今にも丸太棒の一撃を受けそうになつていました。

「一寸待つて下さい」

と父は飛び込んだのでした。さあそれから交渉が始つたのですが仲々まとまらない。結局其場での撲殺はやめるが、すぐ引渡すことも出来ない。夕方警察本署に戻るから、それまでに本署で登録手続きをして置くように。その上で返してよいとあらば引き渡そう、ということになりましたところが父は

「そんなら私もこれからこの犬について行く。貴方と一緒に警察まで行きましよう」

と云つて、ノコ〳〵野犬狩の人と一緒に歩き出しました。大きな棒を担いだ所謂「犬殺し」と、立派なひげを蓄えた父と、もう心配もせず尻尾をふりながらついて行く犬と――何とも奇妙な一団だつたことと思われます。二時間ばかりをそうして歩き廻つたそうですが、とう〳〵犬殺しの人が

「困つたノウ。旦那にノソノソ食つ付いて来られて、そう念仏ばかり言われては、てんで仕事にならん。仕方が無いから、これから一応本署へ戻ろう」

と悲鳴をあげました。それで、又その一行で市中を堂々と本署までの行進をして、やつと勘弁して貰うて、さて天下晴れての御帰還が四時過だつたのでした。

美味しそうに食事を終えた父が、例の人なつつこい笑みをふくんで、手のひらをひらり〳〵と振りながら、静かな口調で語りました。

「今日はね、私がテルだか、テルが私だか、判らなくなつちやつたよ。荒縄で首根つこをしばられて、逃げることも、どうすることも出来なくなつているテルを見たらね、これこそ私自身の姿なんだと気付かしていただいた。……業の荒縄で身動きも出来ぬ様に、ガンジガラメにされている。丸太棒に待ち構えられている。私とテルと何処が違うんだろう。全くおんなじ姿じやないか……。でね、ここだな！これを見そなわして下さつているんだな！と如来の御心の忝けなさが焼きつくように身にしみてね。よしテルよ、お前が助かるまで、私もお前から離れないよ、という気持ちにならしていただいた。如来様の何百分の一かの気持ちにね」

と言つて、父は大きな声で流れるようにお念仏を称えました。夕方になつて、半日の心配で疲れたか、テルが一株の萩の葉蔭にねそべつているのを見た父が

「どうだ、テル、うちの萩はきれいだろう」

と椽側から明るく声をかけました。
父はよく犬や猫に話しかけたり、独り言を云つたりしました。私達子供に、何か言つたのかとふり返えると、そうでなかつたことが、よくありました。
それにしても、この時のこの父の言葉は、声も調子も、つい先程の事のようにハツキリと私の耳に残つて居ります
そして、
「どうです、うちの萩も、きれいでしよう」
と話しかけて、今年の二十三回忌を迎えさしていただくことであります。

或日の池山先生

花田正夫

それは私がまだ六高の生徒の頃でありました。其日はドイツ語の試験の時間でした。難問を前にその解答に苦しんでいますと、何処やらにブー、ブーという軽い音がきこえますので、教室に蜂でも入つているのかとあたりを見廻しましたが、それらしいものは見つかりません。そこで、又筆をとつて居りますと、又聞こえて来ます。今度はその音の聞こえて来た方向に眼を向けますと、教室の窓際で外に向いて静かに立つていられる池山先生の口からその音が出て居りました。更に耳をこらして聞きますと、それが先生の称名の声でありました。
その後友達二三人と三友寺境内の先生の御宅を訪問した時
「君方のうち都々逸の出来るものはないかね、さあこれを歌つて見給え」
と仰言つて、紙片に、元気な字で
衆生かわいや生死の海におのが罪から浮き沈み
久遠このかた子故の廻向わたし一人をかた思い
とお書きになりました。然し私共は野暮臭いものばかりで粋な都々逸などの出来る者は居りませんでした。そこで大笑いになつてしまいましたが、暫くして
「実はね、この唄は、試験の時間に出来たんだ。」

と仰言つたので、私は初めて、その時間に、しきりにブーブー、ブーと念仏の声が先生の御口からもれていた原因が解つたのです。あゝそうか、道理でなあ！と大いにうなずきました。
さてその次に先生は
「私は内心、あまりのんきな父さんなので、これでも親としての資格があるかとあやぶんでいたが、次男が大病して手術をしなければならなくなつたので、病院につめて居つた。すると、われながら驚くことには、親と子は一つだとしか思えぬようなことを、病人の為に自然にやつているのだ。そこで自分にも親らしいところもあるのかなあと意を強くした。
それについて、私は今病む子の上についてこうした心が仂くが、それでは他の子供の上には、と反問して見たところ、みんな一人々々がかけがえのない子なんだ。そこで初めて知らされたことは、親が子供が可愛いというのは、十把一絡げに可愛というのではなしに、一人一人が、長男は長男で、次男は次男で、長女は長女で、次女は次女でかけがえがないんだ。その自然の結果、子供は皆可愛いとなるのである。
そうしたことが今更のように知れて来た時、親鸞聖人が常に『弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思し召し立ちける本願のかたじけなさよ』と仰言つたのも、十方衆生を憐れまれる仏心を無理に親鸞一人がため、と表白せられたのではなく、如来が衆生の一人一人をかげがいのないものとして、憐愍して下さるから、自然に、親鸞一人がため、とお味わいになつたということもはつきりと知れて来て、久遠このかた子故の廻向、わたし一人を片思い、の唄が浮んで来たんだ、片思いをおさせ申している、わたし一人をね…」
と述懐されて、しきりに念仏して居られました。

○

これは京都の蓮華谷に移られた頃先生のお好み通りの新居が出来た、晩年の或日のことでありました。
「わたしの父は庭いじりや、土いじりが好きだつたが、その頃は、そういうことの出来るゆとりのある家にも住めなかつた。今度は家の囲りにすこし土地のゆとりがあるので、父が生きて居てくれたらなあ、と思う。
また、母は老年まで生きていたが、年老いた母が一番難儀をしたのは夜の便所通いだつた。雪洞を持つて、足もとに気をつけ〳〵していたが、今度は電気で明るくなつたので、そのスイッチをいれるたびに母が居たらと思う」
と述懐せられたこともありました。

○

また秋晴れの或日の午后でした。先生は開口一番、

「人の悪いことを知つて、積極的にそれを憐れんで遂には同化して了うというようなことは出来なくても、消極的にその悪いことが責められぬという人があるだろうか」

と、突然たずねられました。一座の者が顔を見合せていると、微笑せられながら

「歎異抄の十三章に、さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべしとこそ、聖人はかねて仰せそうらいき、とあるがその聖人がその人だ」

と語られました。そして当時出版された『白道を歩く』と言う本を指示されて、

「この著者が、藤原義江という人のところに、子供二人と主人を捨てて走つた奥さんのことを、人非人であるときびしく非難しているが、すくなくとも聖人の流れを汲むものとして、それだけでいゝのだろうか。

成程、悪いことは悪い、感心したことではない。然しながら、この奥さんもわれ〳〵も同じ煩悩具足の凡夫であるその点では同じであるから、さるべき業縁の催しをうけては何時いかなる事をしでかすかわかつたものではない。して見ればこの人だけが悪い、自分は別人種だとは云えまい。煩悩具足とあるからには罪悪の免疫性はない。

更に、親殺しの阿闍世王が、やがて廻心懺悔して、我等の大先達と転じたように、この奥さんもまた何時こうした御縁に恵まれるかも知れない。すると好人、妙好人としてこちらが愧じ入る時が来ないとも限らないのだ。」

ときびしく語られたこともありました。律法的善悪沙汰に対する、絶対信の表白でありました。

○

これは御大病で大学も辞められ、お好きな煙草も一日三本しかおすいにならなくなつた頃の或日でありました

「生涯たしなんで来た煙草を自分でやめようなどとは思つたこともなかつた。ところが或日、台所の方で娘と家内がしきりに何か私語いて歎いていた。フト聞き耳立てると私の喫煙量がすこし多かつたといつて、身をあげて歎いているんだ。それを耳にした時、私のことをこれ程までに思つていてくれるのかと、その心根がいじらしくなつて一日三本ということにすつぱりきめたよ」と言われて、更に

「君方も、たゞ念仏して、と仰言る、よき人の私のためのやるせのないお心を頂いて見なさい、称え難いお念仏も案外すらすらと申せるものだ」

とも言われ、また、

「孫が菓子などを持つてきて、これをおじいさんにと言つてくれることがある、そこで有難う〳〵と言つて、おいしい〳〵と言つて食べると、孫が非常に満足してよろこぶ

ものだ。

そのように、念仏を有難いと感じられなくとも、仰せのまに御名を呼べば、仏様がよろこんで下さるのだ。その仏様のおよろこびを思えば、念仏も申されるものだ。要は、こちらの思惑をすてて、向う様の思いをいただくんだ」とも申されました。

○

更に「ただ念仏」とは、「ただが一心正念」「念仏が直来」である。「たゞ念仏」とは「一心正念直来」。そのこころは「オネガイダカラスグキテオクレ」である。と長時不断の火と燃えての、烈々火を吐く如き悲心をそこに拝しました。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

○

また或日でした。

「念仏は粥である。罪悪深重、煩悩熾盛と名のつく、いかな名医も匙を投げる難病に罹つた者のために、特に工夫せられた粥である。米も肉も野菜類も、普通の食物は消化出来ず、それから栄養をとるわけにいかないほど胃腸の弱り果てている病人目当の粥なのである。この粥は、その病人にとつては、絶対唯一無二の必需品であつて、それを外にして栄養をとる方法は絶無なのである。

粥でもいいではない。粥もいいでもない。粥がいいでもない。粥でなくてはいけないのである。

念仏でなくてはいけないのである。ホンにそうであつたわいと、念仏の粥をおし戴いたところが、大いなる受け容れである。」

とも申されました。

○

昭和十三年十月卅一日友子夫人の「霊前に語る」に。お言葉の自由が漸次失われて行く上に、お身体の自由も失われかけて来ました。全く胸のうずく心地かいたします。……。

御就寝前、食間のお薬をと水呑に傾けていますと、静かにお念仏されました。やがてお薬がすむとお頭を綻ばせられて何か囁かれたい御様子なので、お口元に耳をよせますと、とぎれ〳〵ながら

「何も残るものはない、何も残るものはない。ただ念仏だけが残つてくれる。ただ念仏だけが残つてくれる。偉いこつたよ、有り難いこつたよ」と、お声はそのまま消えました。……

『呼子鳥』

これが先生の地上最後の無問自説の法味でありました。

聚墨生和南

池山先生の思い出

都崎雅之助

私は池山先生に教室ではお目にかゝる機会がなかつた。しかし幸にも、六高仏教青年会に縁があつたので、友人に連れられて先生のお宅へ時々御邪魔したのであつた。

先生のお宅へお伺いして御指教をうけた事柄は数多いがその中でも、次の二つのことは忘れることができない。

一つは、丁度その当時先生が、歎異抄のドイツ語訳を始められた時であつたので、歎異抄をドイツ語で御教示下されたことであり、今一つは奥様が胃癌と診断された時、御夫婦の感想を吾々学生に述べられ、その日、以後、奥様の御逝去までの御安心を喜ばれた御生活の有様であつた。

歎異抄を始めて知つたのも池山先生のお蔭であり、それもドイツ語の勉強をかねてドイツ訳で教化されたことは、ありがたい事であつた。その後私は、在外研究員として、ドイツで一年余り滞在中も、先生の独訳歎異抄は、心の糧となり、あるいは、ドイツ仏教会の連中に読ませて、仏教の話題の中心としたことであつた。

その後先生の意訳歎異抄が出版されたので、これも幾度も読ませて頂き、その訳の慎重なことに驚歎した。

池山先生が不治の病を宣告された奥様と、最後の幾月かを信仰を深めるためにのみ努められ、業報に随順せられた生活の対度は、世の中のことを余り知らぬ学生達を、無言のうちに強く教化したのであるが、自分が当時の先生より老年となつた今、その生活を省みて、何とも情ないことだと慨歎するだけである。

先年先生の遺著を通覧した所、岡山時代の思い出に、学生達がよくお宅へ出入した事を書いておられるが、私もその中の一人で、どれだけ御迷惑をおかけしたことであろうか。

そして六高を卒えて、東大へ進むことになつた時

「東京では近角先生の所へ行き給え」

と御紹介を頂いた事であつた。

こうして池山先生は、私にとつて、よき人の最初の方であつた。

凡俗雑感二題

松村勝治郎

一、信仰の素地

私の郷里福井県は、今なを仏教の旺んな地方として知られている。なかんずく生れ故郷の三方町鳥浜は戸数二百戸の純農村ではあるが、浄土真宗にかたまつた信者の多い部落である。

特に亡き父は、生前長年に亘つてお寺さまの世話方をつとめた敬虔な信者であつた為であろうか、物故の際には、時の住職、山名貫道師は読経の数句をはじめるや、父の霊前に泣き伏して、しばし頭をあげられなかつた厳粛な光景は少年時代の私の脳裡を離れなかつた。

父に数年先んじてみまかつた母もまた父に劣らぬ熱心な真宗の信者であつた。母は娘時代、地方の慣例にならつて京都へ見習奉公に出たが、幸いとその宅は本願寺の世話方であつた。ひなびてはいても、その誠実なつとめ振りを買われたためだろうか、そこの推薦で、某宮家につとめる身となつた。

松村家へ嫁いで、頑健な姑なる祖母を助けて、農事に、家事に、或はお店仕事に、働きつづけた。過労がたたつて、祖母を見送ると半歳足らずで母もみまかつた。

その時の母の態度はまた美事なものであつた。仏壇に礼拝して、二声三声念仏を唱えると同時に、莞爾として、息絶えたことなど、亡き父も母も、少年時代の私に、根深い信仰の素地を作つて頂いた様に思われてならない。

二、慈顔愛語の池山先生

六高時代の三ケ年は目まぐるわしい生活であつた。なかんずく、週十四時間もあるドイツ語の授業には、聊か閉口した。ともすれば運動競技に追われ勝ちの学生に、地味なドイツ語の予習や復習をやらねばならぬ事は相当な痛手に違いない。

ところが、池山栄吉先生の独逸語の授業は、学生にとつてまさしく救いの神であつた。不勉強な学生に対しては当然ありがちの強制や、皮肉や、お叱りなど、先生のお口からは、かつて洩れた事はない。

「今日は予習をやつて来ません」
などと、言おうものなら、大抵の先生方からきついお目玉を頂くのを、先生は、
「次回にはしつかり勉強して下さいよ」
といつた、極めて柔かなおさとしである。ところが学生達にも良心はある。一度はよいとしても、二度三度と、池山先生の御期待に背くわけにはまいらない。他の学科はさておいて、先生の授業だけはしつかり勉強せねば相すまぬといつた気持にかり立てられる。
その上、教室のあちこちを「なんまんだぶつ〳〵」と小声で口すさみながら漫歩なさつたお姿は、何としても神々しいものであつた。

先師の二十三回忌を迎えるに当りて

榊原徳草

今年の十一月八日は池山先生の二十三回忌に当る。早いものである、もう二十三年もたつてしまつたのである。御葬式はたしか六角会館であつた、谷大から大須賀秀道学長が焼香に出席されたのが眼に残る、それはどうしてかといえば、そのほかには、所謂、貴顕名士の顔が見えなかつたからで、参会者の殆どは先生の御念仏に触れてその恩徳が身にしみている人々ばかりであつたからである。
平たくいえば同志の法友が主な参列者であつたからである。帰路寒い風が吹いていた、寒さしのぎにどこかであつていうどんをたべて談り合つたことを覚えている。
先生は御生前には、いつもきれいにお顔を当つていられたのに、最後のお別の時のお棺の中の先生は、長いひげが恰も支那古代の聖者の像にみるように、生えていた。常日頃の先生よりも哲人賢者といつたお姿であつた。温容は消えてその底にほのみえていた強い面の先生がそのお顔に顕れていた。親鸞聖人が御本典の中に、高い情感に溢れて筆をとられたと感じる師法然上人から選択集の筆写を許された下り、あのような恰も子供が親からとてもいゝものを貰

つた時の歓びにも似たあの聖人、その同じ聖人が歎異抄、第二章『親鸞におきては、たゞ念仏して云々』の下りでは、深く自己に沈潜されて、師上人に承つた往生浄土の要訣を、独り言をつぶやくように、関東の御同行の前に披歴される、あそこには聖人の、あの「鏡の御影」にみるような強い面、静寂な面が出ていると思う。先師池山栄吉先生にもこのような二つの面があつた。犯し難い、こわい先師とそれを包む温容溢るゝ先師との二つがあつた。私など常に甘えて温い面だけに寄りすがつて行つたが、時折はドキンと受けとめられたり或は無言のうちに鋭くはねのけられたりされたことがあつた。
先師が第一回の大患に臥されたとき、いつだつたかお見舞に上つたが、許されたのは扉の外から一寸ほど明けて頂いて、御病臥の先生を拝する一分かそこらの時間だけであつた。下女の導きで例の洋間の扉の前に立ち、一寸程開いてくれたすきまからお姿を拝したのだが、その時の御顔は病に苦しまれて、それを忍んでやうやくにして生を保つていられる苦悶の先生のお顔だつた。鋭い眼差しで私をとがめるような、叱るような、またなにか訴えようとするような、いつも拝する温容とは似もつかぬ鋭い淋しい苦脳のお姿だつた。そのお姿をわずかでも私に拝面を許された先生の御心を、今にして思う、その御心の底に温いものが流れていたからである。
しかし、私のその時の直感は、先生でも苦しい時にはあの温容があのお顔になつてしまわれる、あのお顔でお浄土に参られるのだ、そんなら私でも、いつでも、どんなでも御浄土に迎えられることができる、先生と同じように。そういう一つの私には得難いものを感じたことであつた。
先師に永別して年月を経るにつれて、いよいよ身に感じることは、よき師に遭わせて頂いたこと、これ一つが弥々鮮かにその輝きを増し、その恩徳にうるおうという、身に余る有難さ尊とさである。
先生が御講話のたびに必ず一度は出てくる『「親鸞におきては」とあるのを、「池山におきては」とおきかえて、たゞ念仏して弥陀に助けられ参らすべしと、「よき人」とあるのを「よき人、親鸞聖人」の仰せを蒙つて信ずる外に別の仔細なきなり云々』とお話を続けられる、人指し指を御自分の胸の方に自ら指されながら、少し前こゞみになり俯きながらこの条を話される、あのお姿が、いつの講演の時でも拝されるのにきまつていたが、私にしてみればこれをこのまゝ「榊原においては、たゞ念仏して弥陀に助けられ参らすべしと、よき人池山先生の仰せを蒙つて信ずる外に別の仔細なきなり」となつて、自然にそうなつてお念仏が入つてくるのである。

先生に遭い得たのが三十二才の頃であり、それから約十年間、先生の最も晩年の慈育に浴し御往生に会うのだが、それ以後今年先生の二十三回忌を迎えるにあたり私は満六十歳となつたが、先生に初めておあいしてから今日只今に及ぶまで一貫して先生から私に残されたものは、夜となく昼となく、忘れられた時でも思い出したときでもそれらの一切をつゝみ私に貫流してくるもの、私にあるもの、私を私と知らせられ、阿弥陀仏を阿弥陀仏とはつきり知らせて下さるもの、それは「榊原におきては、只念仏して」である。南無阿弥陀仏である。

先生は御生前の或る時、私のつきつめた質問に対して、

『いろいろのことはありましたが、たゞ念仏してですね』

と悠容として応えて下さつた。これまた現在の私に、そつくりそのまゝ頂戴する御言葉である。私には色々の事が後から後からと出てくる。臨終の死の間際の一瞬まで一向に妄念妄想の絶えない巣窟がこの我が身である筈である。今日迄のように相も変らず、愛増違順し、高峰岳山となつてしまう、まことに聖人の御和讃の通り、二河白道の通りであろうが、これらを包摂し貫流して『いろ〳〵のこと』と絞めくゝつて『只念仏して』が掃き清め、それらを愈々明確にさせてくれるのである。

我ながら、よくも斯く乱れ果てる我が身なるかなと呆れるばかりなのに、それをいよ〳〵呆れもせず、『只念仏して』が私に授けられてくるのは、『よき人』を通してのお念仏一つである。これはお念仏と先生とが二にして一、一にして二だからである。お念仏が即先生だからである。

先生と言えば、それはお念仏より外に出てこない人格である。人と法とは常に不一不異である。

『法は独り興らず、人によつて興る』という。先生という人によつてお念仏という法が興行した、念仏がいかに尊く勝れており大慈悲そのものであつても、人を通じてこそ流通し我が身のような者にも実際に遭う事ができた。

然し又、先生は、或時『その時、聖人はフト姿を消される』と講話のどこかで言はれたことがある。所謂、善知識頼みとなり、お慈悲だお念仏だと云い乍ら、実は師だけに常にひかれて、それに陶酔していることがある。いつてしまえば私もそのあやまちをおかしたものである。こゝに我等人間の暗愚性があり迷妄の根源がある。誤りを誤りと悟り得ない、正しいと思い師を仰いでいるまゝが実は師の本意に逆行しているのである。釈尊が入涅槃の時のことが仏遺教経に出ているが、その遺教の総結の聖語は、私が涅槃に入つても、法は無くならない、法こそ永遠不滅である、だから法によりなさい、という御こゝろであつた。これを私に当てはめると、池山師先なきあとは『只念仏して』の法

によることである。釈尊は私は滅びても法は不滅の光を永遠に放つと御親切にも涅槃を前にして言い残して下さつた仏涅槃図には悲歎にくれた数多くの弟子達が囲繞している師の入滅を悲しむのは真実である、然し入滅を悲しむのは師の遺されだ法の真実、師から身に感受した真実が実はこの悲痛をうむのである。師が生きている間は師に依つて真実を受けた、師の無きあとは何に依つたらよいかとの惑いが生じてくる、その惑いに答えられた仏の聖語が法に依れであつた、仏の在す間は、法は仏の内に、仏を通して輝いていた、仏は法の事実の現れであつた、この場合は仏が法そのものであつたと言える。師と法とは一である。人法一如である、だから師と法とは分け難い。

だから法の真実が師を慕わしめることが、師のみを慕う邪道に陥つて、法がいつのまにか我を増長せしめる役目に変形してしまうことになり、つまり法が法でなくなつてしまつて迷いの根元のおれが〳〵の自我の反映になり、法の名を借りた自我の増長にすぎなくなつてしまう。

無始の無明煩悩という、いつから始まつたか判らない迷いの根元が無明である、始まりが判れば、これを消すこともできようが、今言つたように正しいと思つてしていることが迷いとなつているのでは、まことに無始の無明煩悩であつて、どうにも手の下しようがない。

『このとき、ふと聖人は姿を消される』の一語は、まことに深い微妙な法である、お言葉であることを知らされるのである。二十三回忌を迎えるに当つて、いよ〳〵この聖語が有難い、とことん迷うているのが我等であることが知らされてくる、どうにも仕様のない奴ということが知らされるのである。

それから、先師在世のときと御往生後のときと、この二つの場合の私を比べてみると、御在世の時代は、困つた時は先生の所へ行けばよかつた。ある問題を身に抱えて煩悶懊悩していても、先生の所へ行けばよかつた。問題の個所をお尋ねしようと先生の御居間に参ると、お顔を拝しそのお念仏の声にふれると、私も自然にお念仏に唱和さゝれてそれで凡てが解消してしまうのであつた、質問の個所も何も無くなつて、心は和らぎ身体は清風に浴しているようになつてしまうのであつた。

しかしお宅を辞して元の古巣に帰えると数日のうちに元の木阿弥になつてしまつたものである。それでも先師が居られる、行けばお会いできる、という甘え心が止まなかつた。大樹の木蔭に涼をとる者は、たとえそこを離れても大樹あるが故に安心であつたが、御往生の後は、行くべき所がない。例えば今までは雨の日に傘をさして雨を除けて歩いた道だつたが、雨の道は相変らずであるのに傘がないの

である。お念仏で世の暴風駛雨を凌いできたつもりが実は先師のお念仏によつて凌げていたことに気がつくのであるそれからはあちこちの傘に雨を凌ぎ、木蔭を求めて涼を取りながら捨て犬のように迂路つき廻るどこからか、聞え出してくるのは『いろ〳〵のことはありましたが、只念仏してですね』の師の声である。その時の温容である。

傘の下で甘えていた者に、傘のない後々のことを用意されて、遺して下さつた『只念仏して』であつたことは、御往生の年を去ること遥かなるほど、『いろ〳〵のこと』がでてくるほどに、その光輝を増してくるのである。

天竜下ればしぶきがかゝる
きせてやりたや、きせてやりたや檜傘。

先生は、今日はいゝ御馳走をして上げよう、と腕時計をチラと眺める、多分午後の六時前だつた、養子にやられた二男さんのお宅が近所の阪下にある、そこへ数人の吾々を連れて行かれる、ラジオの前に居並ぶ、スイッチを入れるすると、市丸の唄う「天竜下れば」が聞こえてくる。先生は温容をたゝえて、前の机にもたせかけた手先で唄に合わせて拍手を軽くとられ乍ら、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とお念仏される。

きせてやりたや、きせてやりたや檜傘。

こゝに至つたとき、私は泣いていた、お念仏といつしよに泣いて先生の温容を拝した。

ほんとうに、今日はよい御馳走を頂いたと感激して帰路についたのであつた。

それからも、度々、この檜傘のお話は伺つた御生前であつたが、師が御浄土に還帰されてのちこの檜傘が先師とお念仏でなく、いつの間にか独り立ちして『只念仏して』に変つて私に与えられている。

理屈になるが、だからお念仏は、護符でもなく、呪文でもなく、それは人格であり仏格であり仏の慈悲と智慧とが通うて生々躍動している生命である。まことに南無阿弥陀仏であり親様であると感ずる。蓮如上人は『この阿弥陀如来はふかく喜びましましてその御身より八万四千の大きなる光明を放ちてその光明の中にその人を摂め入れておきたまうべし』と云われる。中興上人のこのお文の中からは阿弥陀如来のいのちに通う悦びの情と仏智に照らされた寂けさが現れている。

念仏と善知識とは二つのまゝ一つであり、南無阿弥陀仏と師は別であつて分ちがたい微妙不可思議である、不可思議とまで云われなくても相即不離の微妙なところがある。誤りを犯し易く、仏の御心に逆き易いのは惑いにかけては

何一つ不足のない万端具足した凡夫低下のわれらだからである。そういう無明無知のわれらを「しかるに仏かねてしろしめして」名号を成就されたのであつて、この名号か仏事を作すのである。

西へ向いて歩いている、と思つているまゝが、実は東へ歩いて止まない無明煩悩のかたまりのわれに、法蔵因位の思惟がある、そして本願成就の「いろ〳〵のことはありますが、たゞ念仏して」の果位の南無阿弥陀仏の名号がある。

げに聖人は「自然法爾章」に

『獲の字は、因位のときうるを獲という。得の字は果位のときにいたりてうることを得というなり。名の字は、因位のときのなを名という、号の字は果位のときのなを号という。』

と仰せられ、われ〳〵の底まで迷いの止まぬ奴を目当てに、願と行をはげんで南無阿弥陀仏の名号を成就して下さつたことを教えて下さるのである。

師に負うところの恩徳広大不思議は、たつた六字のお念仏の中から、次から次へと私の死に到るまで、教え支え照らして下さることだろう。

この次の先師の大きな御年忌に会えるかしらん、いのちのほどは期し難い、二十三回忌の今年の御年忌が私の生きている間の最後の御正忌になるのかも知れない。

それで今年の一道会は感慨無量である。

池山先生遺詠

もの思えばやるせなきまま思うこと思わじとこそ思いなししか

逢うてまた別るる日なり今日よりはまたの逢う日のめぐりそめける

われならぬきよらのわれのわれにありて穢悪のわれをわれにしらしむ

来し方の十年の冬をしのぶかな　また人生の春をむかえて

夏されば くぬぎ若葉のなよやかさ　久遠女性のひらめきをみる

木枯のおとも時雨にまがいけり　森の木の葉の雨とふらして

人ならば八十路の坂もこえぬらし梢まばらにのこるもみじ葉

編集後記

池山先生遺詠

わが庭の萩さかりなりここかしこ
白き孔雀のむれいるがごと

よきひとの仰せにききて御名をよべば
よばわせたまう御声きこえぬ

○

一人いてよろこぶこえや明け易き
白道のかなたやいかに秋の風
白道のかなたにつゞく紅葉かな
ここはまたどうしたことで暖かき
あうむけに仔犬ねころぶ日南かな
歳旦にまずおとずれし念仏かな

○

白萩の花か今を盛りと咲き乱れて居ります。この花も散つて、葉が黄色になります頃、池山先生の忌日を迎えるのが例年のならいであります。

今秋は二十三回忌にあたりますので、特集号といたしました。十一月号もこれに続くことでありますが、この中から念仏の薫りを汲み取つて下さいますようにと念じて居ります。

一道会は十月卅日の午后一時から、京都市右京区山田開町、浄住寺、榊原徳草様で催します。有縁の方々の御来会をお待ち申上げます。

○

「微苦笑の聖人」　池山先生の原稿は、「仏と人」から頂きました。先生の御目にうつる歎異抄の二章は、そこに聖人の息吹きのはしばしまでも感得していられるのに唯驚異の外はありません。そして、聖人が先生か、先生が聖人か、けじめのつかぬまでに渾然一体化されて念仏にとけていられるのを拝するのであります。（「仏と人」は、京都丁子屋出版）

執筆者の住所

高知市中久万八三　池山　寿夫
東京都世田谷区北沢二ノ一一五　都崎雅之助
東京都目黒区富士見台一四五四　松村勝治郎
京都市右京区山田開町浄住寺　榊原　徳草

御案内

池山先生廿三回忌

時・十月卅日午后一時
所・京都市右京区山田開町浄住寺
道順
京都駅より苔寺行バス
終点下車　南へ三丁位
新京阪桂駅乗換
嵐山行き、上桂下車、西へ七丁

○

一道会館、日曜例会。南区駅上町二丁目。毎月第一、二、三日曜、午后一時半。
教西寺、法話会。昭和区小桜町。毎月廿四日午前、午后。

定価　一部　二十円（送共）
半年　百二十円（送共）
一年　二百四十円（送共）

名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人　花田　正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田　政雄
名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十二巻第十号昭和三十五年十月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可